

日本行動分析学会第6回大会

発 表 論 文 集

1988年6月

愛 知 大 学

ニホンガルの返事行動の実験的研究

下田 英一 (大正大学カウンセリング研究所)

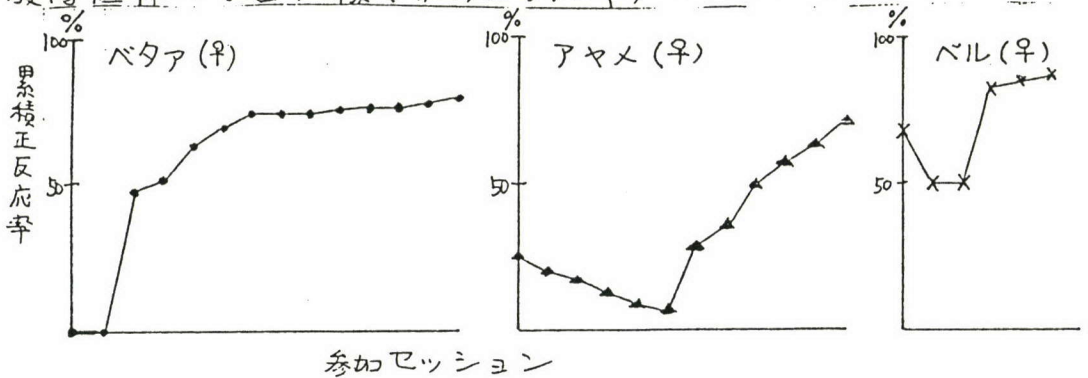
<目的> 高尾山 動植物自然センターのニホンガルの返事行動が音声の道具的使用であるかどうかを実験的に確かめる。また、弁別の可能性を探る。実験の後、返事行動の獲得の過程、要因を検討する。

<方法> 被験体は、ニホンガル34頭(♂18, ♀16)。

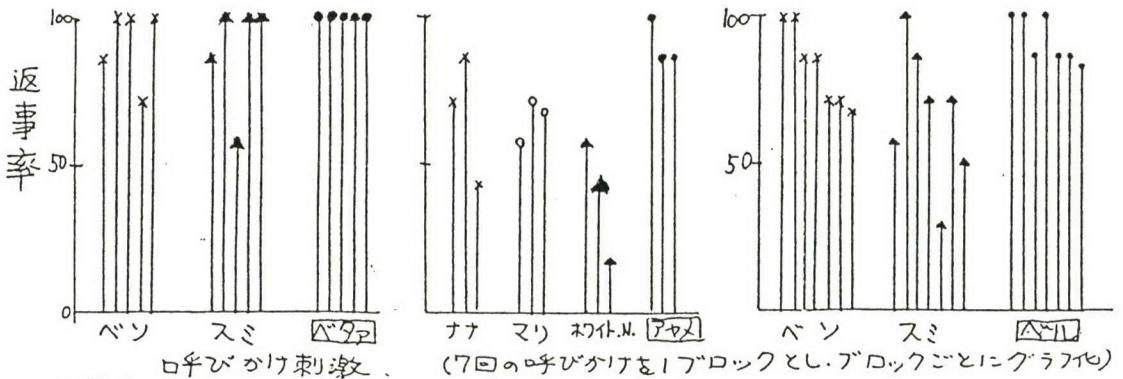
彼らの返事行動が音声の道具的使用であることを確かめるためにオパラント条件づけの手続きを用いる。①装置前に登場した個体の名前を弁別刺激として呼びかける。②呼びかけに対し、サルが「ku」などの音声を発した場合強化する。③返事行動獲得基準(正反応率80%を3セッション)を突破した個体に弁別学習を行う。1. 親の名、2. 他家族の親の名、3. ホワイトノイズ、4. 自分の名を順次呈示し、4の呼びかけに対する反応のみ強化する。

<結果>

・獲得個体の学習曲線(累積正反応率) → 3頭に獲得がみられた。



・自分の名前の弁別は、完全ではないがかなり弁別しているらしい。



<考察>

タイプ	呼びかけの音	家族順位	順位	年齢	性別
A	多	高	高	年寄り	オス中心
B	少	高	低	若い	特徴なし

タイプ	呼びかけの音	家族順位	順位	年齢	性別
C	多	低	中	年寄り	特徴なし
D	少	低	中	中程度	オス中心